



小川町長 松本 恒夫氏

町長のメッセージ

小川町は、美しい山々に囲まれ、町の中央に川が流れる豊かな自然や、和紙や酒造などの伝統産業が生き続ける町で、その街並みの風情から「武蔵の小京都」と呼ばれ、近年では有機農業が盛んな地域としても知られつつあります。

また、テレワークなど新しい働き方が急速に広まる中、都心から比較的近い移住の適地として注目されており、当町では移住相談の充実やサテライトオフィスの整備などに取り組んでいます。

さらに、「ゼロカーボンシティ宣言」などSDGsにも取り組み、「自然の恵みと文化を未来につなぐ、人が輝くまち おがわ」の実現に邁進してまいります。

はじめに

小川町は東京から60km圏、埼玉県の中央部よりやや西に位置し、北は寄居町、東は嵐山町、南はときがわ町、西は東秩父村に接している。周囲を外秩父の緑豊かな美しい山々に囲まれ、市街地の中央には槻川が流れるなど自然に恵まれている。

歴史は古く、縄文時代から奈良・平安時代にかけての遺跡や古墳が多く残されている。中世には、鎌倉街道^{かみつみち}上道が整備され、江戸時代には秩父往還と八王子道の交差する場所として、交通の要衝、物資の集散地として賑わった。

豊かな木材、清流などを利用して建具、酒、和紙など様々な地場産業が生まれた。今でも、職人の技術を生かした建具は高い評価を受けている。町内の3軒の酒蔵では伝統と味を守った酒造りを続けており、酒蔵めぐりなどのイベントも行われている。和紙は、2014年に「和紙:日本の手漉き和紙技術」としてユネスコ無形文化遺産に登録された。自然な風合いから美術工芸品などとしても注目されている。毎年夏に行われる七夕まつりは、和紙の普及啓発のため1949年に始まったもので、竹飾りには特産の和紙が惜しみなく使われている(表紙写真)。

美しい山と川、長い歴史を感じさせる多くの史跡、伝統産業、街並みの風情から武蔵の小京都と呼ばれている。豊かな自然を体感できる多くの公園やハイキングコースも整備され、アクセス面も良好なことから多くの人が訪れている。

✧積極的な移住サポートと施設整備

小川町は、池袋まで電車で1時間程度と都内への通勤圏にある一方、山や川など自然に恵まれており、ほどよい田舎暮らしができる町として関心を持つ人が多い。有機農業が盛んなことから、農ある暮らしや、自然の中での子育てを考える人、有機野菜を使ったレストランなどに興味がある人などから移住先として注目されている。

町では、これまで小川町移住サポートセンターを中心に、様々な情報提供、町内の空き家物件や空き店舗の紹介、リフォーム費用や店舗改装費用の補助などを行ってきた。こうした積極的な施策により、2020年度には、移住希望者受付数124名、相談件数687件、移住件数25組57名の実績をあげている。

本年4月には、駅前に小川町観光案内所・移住サポートセンター「むすびめ」がオープンした。これまで、別々の運営であった観光案内と移住サポートを小川



石蔵コワーキングロビーNESTO

小川町概要

人口(2021年11月1日現在)	28,739人
世帯数(同上)	13,024世帯
平均年齢(2021年1月1日現在)	53.7歳
面積	60.36km ²
製造業事業所数(工業統計)	78所
製造品出荷額等(同上)	1,050.0億円
卸・小売業事業所数(経済センサス)	264店
商品販売額(同上)	232.1億円
公共下水道普及率	53.3%
舗装率	45.1%

資料:「令和2年埼玉県統計年鑑」ほか



主な交通機関

- JR八高線 小川町駅、竹沢駅
東武東上線 小川町駅、東武竹沢駅
- 関越自動車道
嵐山小川ICから町役場まで約7km

町駅前の好立地で一体運営することで、より多くの来訪者へ観光案内のみならず、暮らしの視点からも町をPRすることができるようになり、移住・定住人口のさらなる増加が期待されている。

また、2020年度から、転入者を対象に下りTJライナーの座席指定券購入費補助をはじめた。さらに、コロナ禍で働き方やライフスタイルの変化が進みテレワークも増えていることから、都内からの移住希望の増加に伴い、小川町らしい「新しい働き方をかなえる場所」として、「石蔵コワーキングロビーNESTo」を本年5月にオープンした。歴史的建造物である石蔵の魅力を生かしたサテライトオフィス、コワーキングスペースとして注目を浴びている。

東小川住宅団地再生計画

小川町の東部に位置する東小川団地は1981年に分譲が開始された郊外型住宅団地である。人口は1996年には4,500名を超えていたが、現在はピーク時から約3割減少している。また、高齢化が著しく進んでおり、住宅の維持管理も難しい状況にある。

こうした状況下、町では団地の再生に取り組んでいる。町外で暮らす子育て世代のUターンや小川町に関心を持つ町外住民の移住・定住に繋げるため、住宅団地内の既存ストックを利活用して、居住系施設や子育て支援施設、高齢化などに対応した福祉・介護施設の整備を計画し、多世代が安心していきいきと住み続けられるまちづくりを目指している。

小川町ゼロカーボンシティ宣言

地球温暖化による気候変動は各地で甚大な自然災害を引き起こしており、町内でも令和元年東日本台風により浸水被害が広範囲で発生した。小川町では地球温暖化対策として、2021年2月に「小川町ゼロカーボンシティ」を宣言し、二酸化炭素排出量実質ゼロを目指している。現在、町では、公共施設への太陽光発電設備や高効率空調設備の導入、廃食用油をバイオディーゼル燃料とした再資源化など、二酸化炭素排出抑制対策を推進している。また、有機農業をはじめ、町の資源を活用した地域循環型農業を応援し、持続可能な環境保全型の農業を推進するなど、環境問題に積極的に取り組んでいる。

小川町は、豊かな自然や歴史・文化、伝統産業などの資産を生かしながら、未来に向けた持続可能なまちづくりにより「自然の恵みと文化を未来につなぐ、人が輝くまち」の実現に取り組んでいる。(吉嶺暢嗣)



多彩な小川町の野菜